

## ハイデルベルク信仰問答講義解説38「言葉を真実足らしめるもの」(2012年6月3日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

「立ち帰れ、イスラエルよ」と主は言われる。「わたしのもとに立ち帰れ。呪うべきものをわたしの前から捨て去れ。そうすれば、再び迷い出ることはない。」もし、あなたが真実と公平と正義をもって、「主は生きておられる」と誓うなら、諸国の民は、あなたを通して祝福を受け、あなたを誇りとする。(エレミヤ4：1-2)

神は真実な方です。だから、あなたがたに向けたわたしたちの言葉は、「然り」であると同時に「否」であるというものではありません。わたしたち、つまり、わたしとシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子イエス・キリストは、「然り」と同時に「否」となったような方ではありません。この方においては「然り」だけが実現したのです。神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となったからです。それで、わたしたちは神をたたえるため、この方を通して「アーメン」と唱えます。(Ⅱコリント1：18-20)

## 【説教】

先日、ある知り合いの牧師の説教を読んで大変教えられたことがありました。そこには、ただ「神さま」と祈ることと、神さまを父として、神さまに「父よ」と呼びかけて祈ることでは、天と地の開きがあるくらい違うことだということが書いてありました。そしてこれは奇跡であること、神さまを父と呼ぶ、これは神さまの働きかけと導きによらなければ、人間には決してあり得ないということです。この言葉にわたくしはハッと我に帰ったような思いになりました。それは、自分自身が忘れかけていたことを思い起こさせるものでありました。そうです。わたしたちは祈る時に、ただ「神さま」と祈るのではない。「天の父よ」と呼びかけて祈るのです。その恵みに改めて気付かされたのです。普段、当たり前のように「天の父」と祈る時に、わたしたちはこの奇跡を忘れていたことがあります。

人生に起こる苦難、そこでわたしたちは「神さま」と呼びかけ祈ります。でも大切なのは、何よりその神さまを「父よ」と呼べることではないでしょうか。苦難の時は誰でも「神さま、仏さま」と、わらをもつかみたくなるのです。もう手当たり次第、神さまと呼べるものは拝んでおこう。そういう心理が働くのです。でもわたしたちの祈りは違います。どのような時でも、この天地万物をお造りになられ、御支配されている神さまを「父よ」と呼ぶのです。誰でも良いから「神さま」と叫んでいるのではない。「父よ」と呼ぶことは、そこに深い関係があること、言うまでもなくわたしたちが「神の子」とされているということです。この父と子という信頼の中で、わたしたちは神さまに祈ることができるのです。

さて信仰問答は、問99-102にかけて十戒の第三戒を扱っています。「主の名をみだりに唱えてはならない」それは正しく神さまの御名を呼ぶための教えです。信仰問答は四つの問答を用いながら、正しく神さまの御名を呼ぶことについて教えています。前回読みました問99には「この方がわたしたちによって正しく告白され、呼びかけられ、わたしたちのすべての言葉と行いによって讃えられるためです」とあります。そのための教えとして第三戒をわたしたちは読まなければなりません。

わたくしは、この正しく神さまの御名を呼ぶことと、神さまを「父よ」と呼ぶことは深いつながりをもっていていると思います。すべてはこの「父よ」という呼びかけにかかっていると申し上げてもよい。わたしたちが罪を赦され、神の子とされること。その救いがある、初めてわたしたちの内に神さまの御名を正しく呼び求める心が起こされるのです。いや神の子とされなければ、そもそもわたしたちは神さまを信頼し祈ることすらできないのです。

こういう話があります。ユダヤ人は十戒を重視しました。そのため古代中近東では彫刻技術が発達しなかったという話。それは第二戒「刻んだ像を造ってはならない」があったからです。

またこれも有名なことですが、第三戒「主の名をみだりに唱えてはならない」があったために、神さまの名をどう発音するか分からなくなったという話。これは本当のことで、今日「ヤハウェ」と発音する言葉、これを神聖四文字(YHWH)と呼びますが、これを「アドナイ」と読み替えていました。それで本当の読み方が分からなくなったのです。ですから後の時代には「エホバ」と読んだりする時代もありました。これは今日では誤読であるとされます。これを「ヤハウェ」と発音するのは、近代の聖書学の一つの功績です。

このように、神の名を口にするのを恐れて、しまいには読み方が分からなくなったというのは、ある意味、御言葉を重んじるユダヤ人の信仰深さを表しているのかもしれませんが。けれどもそれは果たして第三戒の意図するところなのでしょう。人間は正しく神さまの名を呼べない。ならいっそ神さまの名を口にしなければいい。それは非常に短絡的な考え方です。例えば、飲酒運転が一向に改善されない。ならいっそ禁酒をしてしまえ。それと同じような考え方です。世の中の決まりは、得てしてそのように何かを禁じることで解決するかのような短絡的なものになっています。しかし問題はもっと深いところにある。禁じればそれでよいという話ではないのです。「主の名をみだりに唱えてはならない」だから主の名を口にしないのではなく、どうしたら主の名を正しく呼び求めることができるだろうか。そこにわたしたちの思いをいたさなければならないのであります。そうでなければ本当の解決はないと思うのです。

神さまの救いは、そういう表面的な部分で解決を与えるものではありません。人間を根底から新しくすることです。表面的に体裁を整えたり、何かを禁じて解決することではない。むしろ心から信頼して神さまを呼ぶ。そういう生活を造るのです。自分勝手に、自分に都合よく神さまを利用する生き方から、神さまの栄光のために、すべての言葉と行いを用いていく。そういう生活を根底から造っていく。その救いこそ、わたしたちが罪赦されて神の子とされることなのです。

先週はペンテコステを迎えました。聖霊の御業は具体的です。わたしたちの体を神さまの栄光を現す器としてくださるのです。それはもちろん神さまの御名を正しく呼ぶ生活をそこに起こすでしょう。そのために神さまは助け主、聖霊を与えて、わたしたちをイエス・キリストの救いへと導いてくださいます。ローマの信徒への手紙に「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたは人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、アッバ、父よと呼ぶのです。」(8：14-15)とあります。

罪ゆえにわたしたちは神さまとの関係が断絶しておりました。人間の方からその関係を断つたのです。あの放蕩息子の譬を

思い起こします。息子は自分から父親である神さまのもとを出て行きました。彼はそこに自由がある、そこに自分らしさがあると思ったのです。でもそこには自由はありませんでした。自分らしく生きる場所もありませんでした。そこはむしろ罪の奴隷となる場所でした。罪に捕われ、絶えずその誘惑に翻弄される場所でした。彼は徐々に自分らしさを失っていきました。豚と同じものを食べていたことはそのことを表しています。その惨めさに目が開かれた時に、彼は我に返りました。そうだ、父親のところこそ本当の自由があったのだ。父親のところこそ自分らしく生きる場所があったのだ。それは神さまの御名を口にしないことではありません。心から喜んで神さまの御名を呼ぶ自由があるのです。

この自由へわたしたちを解き放ってくださったのが、イエス・キリストの救いです。主イエスは十字架と復活の御業によって罪を赦し、わたしたちの父の下への帰還を助けてくださいました。今日の御言葉にありました。「神の約束はことごとくこの方において然りとなったからです」（Ⅱコリント 1：20）わたしたちを神の子とする約束はキリストにおいて成就しました。そこでは父親が息子の帰りを今か今かと待ちわびておりました。そして喜んでわたしたちを我が子として迎え入れてくださったのです。お前は息子ではないと突き放したのではない。この帰ってきた息子のために祝宴を用意して喜んでくださるのです。

このような父親の態度は息子を甘やかし傲慢にさせるでしょうか。そうではありません。その赦しは神さまへの深い信頼を芽生えさせ、神さまのために自分のすべてをささげることが喜びとする生き方を生み出します。そういう自由が生まれるのです。強いられることではない。禁じることもない。自分から神さまの栄光のために御名を呼ぶ新しい生き方の始まりがそこにあります。

だから、もう神さまの名を口にしないという消極的な生き方ではなく、正しく神さまの御名を呼び、祈り、誓う、わたしたちの積極的な歩みが起こされるのです。間 101 を読みます。前回の説教でも触れたように教会は誓約を重んじます。それはキリストによって、もはや偽りではなく、正しく御名を呼び、誓うことができるようにされたからです。わたしたちの祈りも信仰告白も誓約も、それはもはや偽りではなく、真実なものとしてささげられます。それはわたしたちを神の子とする約束を成就してくださった神さまの真実がそうさせるのです。

「それで、わたしたちは神を讃えるため、この方を通してアーメンと唱えます」（Ⅱコリント 1：20）アーメンは、ヘブライ語に由来する言葉ですが、「真実である」「確かに」「そのとおりに」という意味があります。祈りの最後に「アーメン」と唱えるのは、その祈りが「真実である」との表明であります。けれどもその祈りを真実足らしめるのは、わたしたちの誠実さではなく、神の恵みによるものであり、キリストの御業に他なりません。だからこそ「イエス・キリストによって」祈るのです。そこにしかわたしたちの言葉が真実「アーメン」である根拠はないのです。御自身の真実によってわたしたちの言葉を真実なものとしてくださる神さまの恵みを感謝しましょう。お祈りをいたします。

天の父。父よと呼びかけ祈ることのできる幸いを感謝します。あなたがわたしたちのために約束を成就され、真実を貫いてくださいました。だからこそわたしたちは深い信頼をもって、心からあなたに真実な言葉をささげることができます。どうぞわたしたちの言葉をキリストの御業のゆえに清めてください。主の御名によって祈ります。アーメン。